

Shimane Human Sciences Research

Vol.2

Special issue: Dedication to Professor Tooru Ishii

- Foreward: Message to Professor Ishii Toshiki Murase
- Message from Professor Ishii Tooru Ishii

- Articles
- Relationship between personality types, tendency of developmental disorder,
resilience and stress responses : Using the scale on working attitude types (ScWAT)
..... Toshikazu Noguchi 11

- Contribution to the Federal Public Assistance by the American Public Welfare
Association Midori Nishizaki 19

- Forum Reports
- The 3rd Forum on Human Sciences Research



2019. March

島根大学人間科学部

紀要

第2号

石井 徹先生 ご退職記念号

- 巻頭言：石井徹先生のご退職によせて..... 村瀬 俊樹
- 心理学研究室の日々を振り返って..... 石井 徹

- 論文
- パーソナリティ、発達障害傾向および回復力（レジリエンス）とストレス反応との
関連－労働態度尺度 ScWAT を用いて－
..... 野口 寿一 11

- アメリカ公的福祉協会が連邦政府の公的扶助に果たした役割
..... 西崎 緑 19

- 第3回人間科学研究フォーラム報告



2019年3月

石井徹先生のご退職によせて

村 瀬 俊 樹

石井先生のご研究の柱は「常識と非常識」、あるいはそれを調べる道具としての「ふつうと変」という日常感覚である（たとえば、石井, 2001, 2005）。これは研究テーマであるとともに、石井先生の行動の指針となる関心のありようであると思う。このことについてまず述べてみたい。

私と石井先生との出会いは、学生時代にさかのぼる。出身大学では、3回生になって専攻が決まり、研究室に頻繁に出入りするようになるのだが、心理学研究室では、大学院生が中心となって様々な研究会が開かれていた。その中に社会心理学研究会 Jr（社心研 Jr）というのがあり、3回生の私はそれに参加してみた。そこに、大学院生の石井先生がおられたのである。研究会の最初の日、会の幹事をしておられる別の大学院生の方が、「お酒を飲みながらという雰囲気で行きたいから」と言って、ビールなどをたくさん持ってこられた。全員3回生以上の成人なので法的には問題はないのだが、「お酒を飲みながら勉強をするのか?!」とナイーブな私は驚いたものだった。ところが、翌週、石井先生が「今日はこれで研究会をしましょう」と言って、牛乳をたくさん持ってこられた。「お酒の次は牛乳か?!」と、そのギャップにもう一度驚いた。

幹事の院生さんと石井先生は仲が良いのだが、お酒を飲まれない石井先生は、お酒を飲みながらというのに反発されて、牛乳を持ってこられたのだろう。このエピソードから私が学んだことは、人の考えはいろいろであり、他の人がどう考えようが、自分の考えをちゃんと持って生きていかなければいけないということだった（それが実行できているかどうかは、はなはだ怪しいものだが）。当時は、今よりもっと、お酒を飲んでコミュニケーションをとることが常識的な価値とされていた時代なので、今にして思えば、常識と非常識という石井先生の研究テーマの底流は、このころからしっかりとあったのだろう。

ところで、石井先生の口癖の1つに「ダメ元です」ということばがある。口癖というより、メールなどでよく現れる決めゼリフといったほうが正しい。ダメ元というのは、やってみてそれどうなるか試してみましようということであると考えることができる。いろいろな研究スタイルがあるので偏った見方かもしれないが、社会心理学は、人のまわりの環境設定を人為的に操作し、その下

で人間がどのように行動・認知するのかを客観的に測定し、環境設定と人間の行動・認知の関係の法則を明らかにする学問分野であると思う。そういった意味では、石井先生は、あることをやってみるという環境設定を行って人々がどのように反応するかを見るというように、研究スタイルを実生活の中でも行動の指針としておられるように思う。また、ダメ元ということばの背後には、私たちが常識だと考えていることも実はみんながそう思っているだけに過ぎない可能性もあり、一度それを壊してみる試みをしてどうなるかを見てみるもよいのではないかといい石井先生ならではの発想もあるように思う。ここでも、常識と非常識という石井先生の研究テーマが、実生活の中でも行動指針として実践されていると考えられる。

石井先生の好きなものといえば、甘いものが1つの代表だが（ケーキなどの洋菓子もお嫌いではないと思うが、私の中では、大判焼やお饅頭といった和菓子が石井先生と連合形成されている）、もう1つはコンピュータにまつわるあれやこれやであろう。

コンピュータにまつわることとしては、ご自分で作られたコンピュータ・グラフィックスを用いた迷路（CG 迷路）の研究を挙げておかねばならない（たとえば、石井, 1999）。これは、MS-DOS 上で BASIC を用いてプログラムされた仮想迷路であり、CG を使ったシミュレーション実験のはしりなのではないかと思う。迷路を進む足音が聞こえたり、途中で仮想の火災を発生させたりなど、パソコンが普及し始めた当時としては非常に斬新な実験だったと思う。この研究は、石井先生も非常に気に入っておられるのだと思う。何かのイベントをやろうとすると、「煙をたきましようか?（煙を出して人々がどう反応するかを見てみましょうかという意味）」というブラックジョークを、今でもよく言われる。

また、コンピュータを使った多変量解析にも早くから取り組まれていた。そういった方面に疎かった私も、石井先生を講師とする多変量解析の勉強会に参加することで、因子分析や重回帰分析は使えるようになった。私が指導する卒論でも因子分析や重回帰分析を使う人がたくさんいるので、そういった手法を身につけさせていただいたことに感謝している。また、その時のテキストであっ

た「複雑さに挑む科学」(柳井・岩坪, 1976)は、今でも多変量解析の考え方を理解するためにおすすめの一冊として大事にしている。

コンピュータにまつわることの1つともいえるが、特筆すべきこととして、個人ホームページやツイッターでの情報発信が挙げられる。早くから、ご自分のホームページでいろいろなアイデアを掲載しておられたのだが、ここ数年ではツイッターという新たなツールに出会われて、かっこうの自己表現の場を得られたようだ。この原稿を書くにあたって、改めてホームページをのぞかせてもらったのだが、中高生向けの「勉強で遊びま専科」というコーナーがあった。口頭ではよく聞かせてもらっていたのだが、こんな視点で見てみたらどうですかとか、こんなふうにするとう柔軟に考えることができますよという石井先生のメッセージがてんこ盛りのコーナーであった。

大学の授業の中でも、石井先生のメッセージはよく伝えておられることは承知しているのだが、大学生はもちろん、さらに中高生にも伝えたいという強い思いを持っておられることは敬服するところである。高大接続という枠組みにはめてしまうと嫌がられると思うが、大学で教えている専門のことはもちろん、その専門の基盤となっている一般的な考え方について、直接的な授業やメディアを通じた発信など、様々な方法で中高生にも伝えていくということは、これから大学としても取り組んでいくべき1つの方向なのではないかと思う。

石井先生は、廊下などで学生に会っても気さくに話しかけられる。けっこう厳しいことも言われるが、学生に対する指導を非常にじっくりとみっちりとされるという印象がある。学生と向き合って十分に時間を取って、学生に考えさせながら学

生が卒論を仕上げていくように指導をされるので、卒論発表会では、学生たちは、しっかりと自分のことばで発表できるようになっている。

また、会議の場でもそうだが、授業の中でも、比喻を多用されるのが石井先生の特徴であるように思う。マインドマップを愛好されているように、石井先生の頭の中で、いろいろなことが結びついて比喩的な表現になっているのだろう。比喩的な表現をするということは、手を変え品を変え、あの手この手で説明してみようという試みであると考えられるので、自分の考えを伝えることに熱心かつ親切な方であると言えるだろう。

島根大学で研究室が隣になってから30年たってしまった。この間、研究室でコーヒーをいただきながら、いろいろと話を聞いていただいたり、聞かしていただいたりした。何度か改組もあったが、人間科学部の開設という非常に大きな改組もともに経験した。人間科学部を特徴づける授業であるIPM(インタラクティブ・プレゼンテーション・ミーティング)にも大いに関心を示していただいた。また、定年の年まで入試・広報委員長という役目まで引き受けていただいた。勝手な文章での外れであれば申し訳ないが、これまでのお仕事に対して感謝の意を込めて文章を閉じ、お送りしたい。

引用文献

- 石井徹 (1999).CG 迷路における基本ルールの推移. 社会心理学研究, 14, 57-68.
石井徹 (2001). 常識の境界. 社会心理学研究, 16, 133-146.
石井徹 (2005). 常識の規範的影響について. 社会心理学研究, 20, 224-252.
柳井晴夫, 岩坪秀一 (1976). 複雑さに挑む科学: 多変量解析入門. 講談社



20数年前の石井先生(右)と筆者(左)。30年間よく間違えられました！